

2022年6月、シノドスまとめ さいたま教区

1. はじめに：シノドスの体験を読み直す

さいたま教区では、40 小教区、2 地区、1 諸団体からの分かち合いがあり、それぞれは異なるグループ(言語別も含め)、個人に呼びかけ、1 回から 5, 6 回といった回数に分かち合いを行いまとめた。

[所見]

◎こうした、信者一人ひとりが教会に対して抱いている思いを分かち合う機会がこれまでなかったことにあらためて気づき、定期的に分かち合いの場をもちたいという声が多かった。

◎分かち合いで、子どもや青年時代の教会の楽しい思い出、教会に温かく迎え入れられた体験、受け入れられ支えられて洗礼を受けた体験、離れていたときに連絡をもらってつながりを回復できた体験など各自の信仰原点を思い返す機会に。

●コロナで共同体自体が分断されている感じがする。とくに外国籍信徒の教会離れ。またフィリピンの国自体がコロナでひどく影響を受け、日本にいるフィリピン人も苦しかった。

●「ともに歩む」といったときに、わたしたちの歩みは本当に「イエスとともに」歩んでいるのかと問い直さなければならないと感じる。

●資金不足、司祭修道者不在となっている、信者が高齢化、子どもがいないといった課題は各所で。とくに少人数小教区の場合。

●職員がほとんど信者ではないカトリック施設で、信仰を伝え、深める困難さ。

●大災害や国際紛争について感じる無力感。

2. 集められた諸意見

< 1. 旅の同伴者 > 皆さんの教会で、「わたしたちの教会」というとき、誰がその仲間でしょうか。逆に、どういう人、またはグループが、教会の周縁部に取り残されているのでしょうか

・小教区はサロン化しがち。初めての人は入りにくい。「カトリックの排他性」。選ばれた人だけが行っている。新しい人がもっと入れる場を。障害者らにも適切な配慮を。新しく来た人のための連絡先記入カードや窓口があったらいい。

・教会内で一緒に歩みたくない人、助け合いがない、悪口、裁く、見捨ててしまう。裏切られてもゆるしの必要性。難しい性格の人に対する自らの差別意識にどう対処するか。自分の生活を優先してしまう。自分の弱さを認めることで克服。

・小教区の人同士ももっと知り合う機会がほしい。ゆっくり話し合う機会。食事や茶話会なども効果的、ミサ後など。同世代が少ない。コロナ禍で交流減少、感染に気をつけながら少人数の勉強会等は再開、活性化したい、聖書によるつながり、カテキズムを学ぶ。司祭修道者や信徒の人に温かく受け入れてもらった思い出。コロナ禍で消極的な運営では教会は消滅。外国籍信徒によって活性化された。

・教会を離れている信者との関わり。帰天して再びつながることも。教会の再魅力化。手紙・お知らせによるつながり。そのための信徒台帳のデジタル化。

・第2世代以降の教会離れ、義務感、信仰はむしろ痛みに。現代社会における信仰維持の難しさ。者の豊かさの中でキリストの自己犠牲を実践していない。人を愛することは伝わっていなかった。

・教会を訪ねてくる人、求道者への奉仕。結果的に来なくなる人の支援。

・ニュースレターなど文書による交流も効果的。説教要約を聖堂に置くなど、信仰育成の発信を行う。

・日本語教室や子どもの教会学校を通じた外国籍信者と日本人信者との交流。また外国人信者同士の交流の場は助けとなっている。外国籍信徒として、別の外国籍信徒を招く責任があると感じている。

- ・貧富、価値、家族といった分断が社会の中に広まり、教会にも働いている。現実を見、困窮者の声を聞き、出向いていくことの大切さ。言葉より行動する人になる。
- ・コロナ禍によって苦悩している人を置き去りにしてしまった。一方、自ら感染した際に、信仰によって救われた体験。感染家族を救援した体験。

＜2. 聴くこと＞ 教会の内部で、また教会外の人々と、わたしたちの教会は、それぞれ誰に対し「耳を傾ける」必要があるでしょうか。何が、耳を傾ける助けと妨げとなるでしょう。

- ・地域の人たちともっとつながるために何ができるか。地域のイベント（清掃、祭り……）への積極参加。地域の人を呼び込める企画（音楽、料理教室、映画鑑賞会……）実施。
- ・今回のシノドスの集いのような教会に対する思いを分かち合う場を継続したい。「セブンステップ」など分かち合い手法も工夫採用できる。つらいことも安心して話せる場。知り合う場。これまで信徒同士が意見を聞き合う場がなかった。
- ・洗礼を受けた跡のケア、フォローアップ。孤独を感じている新受洗者。
- ・さりげない声掛け。聴いたことを心に留めている。
- ・「隠れ貧困」の人たちとどう寄り添うか。
- ・「聞いてほしい」という現代人のニーズにどう応えるか。
- ・教会外の民家や駅前で、悩み疲れた人の声を聞く、人の孤独に寄り添う活動。受刑者や外国籍住民の孤独感は深い。カトリックの精神を隠さず、地域の小さな存在に。家庭的雰囲気の中で大切にしよう。ふれあいのため。
- ・教会内で「目立たない人」であっても、自由に語り合える仲間になれる。
- ・司祭による信徒訪問。
- ・自殺予防や独居者支援を行う市民団体と協力した支援への参加。

＜3. 声に出すこと＞ わたしたちの生活の中で、また地域社会やその団体の中で、福音の価値を公に伝える場面がありますか。そのために、何が助けと妨げになるでしょうか。社会に対して、誰が教会を代表して発言しますか。

- ・信仰を語る、カミングアウトするには勇気がいる。プロテスタントのあかのように信徒個々人の神との出会いをもっと語るといい。生き方・行動で信仰を伝える。カトリック幼稚園、ボーイスカウトには社会的信頼がある。
- ・ジェンダーやLGBTQの問題について教会内でも少しずつ理解されている。
- ・外国での戦争問題についてもどう関わっていけるか。
- ・教会 HP、YouTube、SNSを使った発信が可能。
- ・有名な聖堂や音楽会など、社会的認知を利用した広報活動、ガーデニング、外掲示板や書籍の活用。地元紙やNHKにもアプローチ。信仰伝達の部材準備。
- ・日本では宗教＝「怖い」イメージ、冷笑的な人も。キリスト教＝善良というイメージも困難さ。
- ・大祝日や十字架の道行などを地域に開放して大々的に行う。

＜4. 祝うこと＞ 祈りと典礼において、信徒を含め、信者全体はどのように参加しているでしょうか。参加は進んでいるでしょうか、後退しているでしょうか。

- ・コロナ禍でミサに参加できず、仲間とも会う機会を失い消息も知れず。とくに外国語ミサはほぼ行われてなく、みな苦しんでいる。
- ・ミサで日常をリセットし新たな力を得る。しかしその力が宣教へと向かっていない心痛。コロナで教会に行けず、ミサがどれほど支えかを実感した。

- ・Zoom など、祈りのためのオンラインツールの活用。
- ・小教区での祈りの集いの計画、主日以外の集いも含め、信心業も大切に。靈的活動の深まりが必要。
- ・聖堂の静謐さ、沈黙を維持する重要性。清潔に整った、美しい聖堂の維持。
- ・外国籍信徒とミサ言語の工夫、聖書朗読を日本語以外でも。冠婚葬祭や教会学校を通じた外国籍信徒や依存症者団体との深い交わり。多言語でともに祈る。ミサの多言語ガイド、日本語学習も大切。
- ・司祭不足に応じて、養成を受けた信徒が葬儀など担っていく。外国籍信者の葬儀にも対応もできるように。入信、結婚といった秘跡準備にも信徒による同伴。

< 5. 宣教における共同責任 > 皆さんの教会では、信仰教育や、社会での奉仕活動の計画は、だれが、どのように決定しているのでしょうか。だれが担っているのでしょうか。その人たちはどのように選ばれ、どんな養成を受けていますか。それ以外の人たちは彼らを十分に支援していますか。

- ・各家庭の家族状況を反映した信仰教育になっているか。
- ・役割を与えることで、共同体に愛情が湧く、人との関係性が生まれる、それが奉仕へと。初めて教会に行ったとき「一緒に掃除してください」と言われて嬉しかった。
- ・教会としての年間目標を信徒総会で提示し、毎月確認する。

< 6. 教会と社会における対話 > わたしたちの教会で、そのビジョンや方針はどのように話し合わせ、決められていますか。近隣の教区、地域の修道会、信徒団体などと、どのような対話と協力をしているのでしょうか。信者以外の一般の人々と、どういった対話、協力の経験があり、彼らからどのように学んでいますか。

- ・「イエスならどうするか」の視点をもった社会問題への対応。
- ・社会から気づいてもらえない人たちへの声掛け（おにぎり一つの会）。地域活動サークルなど、教会外の人たちとノウハウをシェアしながらの困窮者支援。生活困窮者・被災者・高齢者支援、病者・精神疾患者やその他弱い立場の人の支援に関わっても限界や無力感を感じてつらさもある。でも、諦めない。障害者のためのボランティアで傾聴している。
- ・子ども食堂の実施。とくに母子家庭の家族を支援。
- ・無保険の外国人、とくに在留資格のない被收容また仮放免中外国人の医療支援活動、弁護士や通訳者も参加している。医療に連なる、種々の生活支援も。ただし、死者が出るほどの絶対的貧困、激しい差別、公的救済制度から漏れている人々との歩み。
- ・『ラウダート・シ』による環境問題へのアプローチの困難さ。
- ・教会内で言語別にグループが分断してしまう問題。克服するためのアイデア。
- ・教会仲間が医療機関への募金活動をしていて勇気もらった。
- ・教会での外国人支援と教会メンバーの無関心。他の社会活動でも同様の無関心。
- ・ボランティアで互いに支え合う体験は、相互に喜びを広めていく。これ自体が宣教。
- ・競争的企業文化の中で、福音的価値を生きる困難さ。
- ・支援用資金集めのため、廃品・資源回収を行っている。

< 7. 他のキリスト教諸派とともに > 皆さんの教会の周辺で、他のキリスト教諸派の兄弟姉妹とどのような関係性をもっていますか。どういった分野に彼らは関心があるのでしょうか。彼らとの対話の実りと妨げはなんのでしょうか。

- ・他のキリスト教諸派の信者と話し合う場は少ない。

< 8. 権威と参加 > 教会や教区の目標、その達成のための方法、踏むべき段階は、誰が、どのように決定していますか。チームワークと共同責任は、どう実践されているでしょう。信徒の参加はどう

でしょう。教区レベルで、共同決定・共同責任を実践する機関はありますか。その実りと妨げはなんでしょう。

- ・聖職者の権限が大きすぎないか？信徒が受け身なものも問題。司祭に意見が言いにくい。信者歴が短いと他の信者にも気を使う。一方で聖職者への尊厳がなさすぎる場面も。司祭の意見も尊重する必要。
- ・信徒同士が「平等」を主張する弊害。役割の違いを認める。役割については任期を考慮し、より多くの人が参加できるようにするのは大切。人材発掘も。外国籍の人も教会委員会に入る。
- ・ニュースで知る聖職者の醜聞についても自由に分かち合える教会でありたい。うやむやにするのはよくない。
- ・他の小教区との交流。
- ・小教区の現状、財政などを皆で共有、財務改善のための施策を共同で検討。役員の任命辞任などの情報共有、小教区の決定のHP等での公開、アカウンタビリティ。
- ・役員の長期継続の弊害、新しい人の参加を容易にするように。

< 9. 識別することと決断すること > 教会での決定の中で、どのような手順と方法で、わたしたちは共同で識別し、決定を下すでしょうか。どうすれば、それらは改善できるでしょうか。透明性と説明責任を、どのように促進できるでしょうか。

- ・聖霊に耳を傾け、識別する訓練・養成が必要。その機会が小教区でほしい。

< 10. シノダリティの中で自己形成すること > 教会の中で責任ある役割を担っている人々が、互いに耳を傾け合い対話しながら、「ともに旅をする」教会がさらに成長し、共同で識別と決断できるようになるため、わたしたちはどのような養成ができるでしょうか。何が妨げになるでしょうか。

- ・数年前に県毎に行った新福音化の勉強会は、互いに話を聞いて分かち合う機会となって良かった。しかし、共同で識別していく訓練を信徒は（聖職者も？）ほとんどしていない。

3. 結論：次の段階、今後とるべき手順、さらに識別すべきポイント

各教会からの分かち合いの中で、今回のような集いを、これからも定期的に続け、自分たちがどのような教会になっていきたいかという希望を互いに出していきたい、という声が多かった。これを続けていくことが出発点となる。その上で、各教会、地域の状況に合わせて、以上のような、皆から出されたアイデアを活かし、課題を克服しながら、その地域独自の福音宣教のわざを進めていければよい。宣教する共同体として、わたしたちはまだまだ弱い、という実感を多くの人が共有している。

それには、司祭修道者、そして信徒たちが声を出し合い、議論を重ね、互いの中に働く聖霊の声を聞き、その声の中から進むべき道とともに識別していくことが大切になる。その歩みの具体的な何らかの助けを、教区としても行わなければならないだろう。分かち合いの中にもあるように、ともに祈ったり、識別したりといった体験は、どこでもこれまで乏しいと皆が感じている。その養成が必要。

さまざまな課題がある中で、とくにさいたま教区は多国籍信徒が多いという特性。言語別ミサへのさまざまな人の奉仕のおかげで「縦」のつながりはできてきたが、「横」が弱く、外国籍信徒がいつまでも「お客さん」の立場では共同体の成長はない。教会活動、教会委員会へも多国籍信徒をさらに巻き込み、「横のつながり」にあらためて挑戦していくべき。これが将来への歩みの一つの中心の柱。

こうした歩みを進めるとき、とくに教皇フランシスコの二つの回勅、『ラウダート・シ』と『兄弟の皆さん』から各自がよく学び、この世界が一つの「家族」、この地球が「わたしたちの家」だということを、深く心に刻む必要がある。分かち合いの中にもよく出てきたように、共同体での聖書の学びも欠かせない。そうしながら、このパンデミックの「試みのとき」を「恵みのとき」とすべく、注意深く、しかし勇気をもって前に向かって歩み、もっとも弱く苦しむ人々とともに歩む教会でありたい。